

「県民と県議会との意見交換会」 盛岡市会場の概要

〔日 時〕 令和7年11月13日（木）13：00～15：00

〔場 所〕 岩手県議会議事堂 大会議室

〔テーマ〕 「シニアの健康づくり、生きがいづくりについて」

〔参加者〕 （6名）

高 橋 博 子（山岸五丁目サロン）

佐々木 章 一（乙部あやめ会）

村 上 久美子（音訳こだま）

佐 川 了（滝沢市睦大学卓球教室）

小 山 光 孝（いきいきサロン室小路）

昆 江利子（おれんじボランティア）

〔出席議員〕（9名）

小西和子議員（座長）、高橋こうすけ議員、鈴木あきこ議員、村上秀紀議員、

大久保隆規議員、畠山茂議員、高橋但馬議員、ハクセル美穂子議員、小林正信議員

〔オブザーバー議員〕（1名）

軽石義則議員

◆ 参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

○高橋さん

山岸五丁目町内会は盛岡市北東部の閑静な住宅地で、世帯数は約450である。少子高齢化が進み、小中学生70人に対し75歳以上は230人、そのうちひとり暮らしの方は約50人いる。

私が民生委員になってすぐの研修会で、「盛岡市内には現在170もの地域サロンがある。まだないところはぜひ取り組んでほしい」という呼びかけがあった。町内の方々に相談したところ、「応援するから」と背中を押されて、2015年4月から公民館でサロンをスタートした。以後、毎月2回のサロン開催を続け、ことしで10年目となる。この3月には200回の記念の会を開催した。

サロンで力を入れていることは、「町内の皆さんが主役」ということである。その時々リーダーを町内のいろいろな方に交代でお願いし、趣味や得意なこと——手芸、歌、体操、お話などを披露してもらっている。最近では、88歳の方からお菓子の「明けがらす」のつくり方を教わり、大好評であった。10年間で50人以上が登場している。地域の人材という「宝」を探し、お願いし、みんなの中で披露してもらうこと自体、私自身もとても楽しい。同じ人が同じことを教えるのではなく、いろいろな方が登場するので、ワンパターンにならず、みんないつも新鮮な気分で楽しく過ごしている。リーダーになった方は自分の得意なことを披露でき、また、みんなが喜んでくれるので、やりがいを感じていると思う。講師を外部に頼むと有料だが、当サロンは講師謝礼も不要で、運営面でも経費節約ができています。まさに一石二鳥、三鳥である。

サロンの目指すところは、誰もが孤独に陥らず、公民館に気軽に顔を出し、みんなと楽しいひとときを過ごすこと。そして、その交流がサロンの時間だけではなく、日常生活の中で「この前会ったね」「あの時はありがとう」「きょうはどこへ行くの？」といった温かい触れ合いや支え合いにつながっていくことである。

○佐々木さん

乙部あやめ会は、老人クラブである。「しゃべるべ、語るべ、楽しむべ」をテーマに活動している。

従来からの四大事業は新年会、お花見会、春と秋の研修旅行である。クラブ活動としては、近年グラウンド・ゴルフや健康マーじゃんなどの趣味的な活動に取り組んでいる。ゲートボールは月2回、グラウンド・ゴルフは週1回、健康マーじゃんは月2回実施している。昨年10月から県の助成を受け、映画と話し合いに取り組んでおり、盛岡市がロケ地となった映画などを鑑賞している。

乙部地区にはバスも電車もない。国道396号にはバスが朝と夕方に通るが、それ以外は2～3時間に1便であり、我々の活動に利用できる状況ではない。遠方や体の不自由な方については、助成を受け、ジャンボタクシーで送迎している。

いろいろな事業を行っているが、全員が参加できるわけではないので、毎月1回、あやめ会の広報で誰が何に参加した、誰が表彰を受けたなどを紹介し、活動に参加できない方にも会の状況を伝えている。また、公共施設の草刈りなどで資金稼ぎをしている。

また、子供たちへの世話活動として、室内でのゲートボール教室や乙部川の水生昆虫の観察、スクールガードにも取り組んでいる。子供たちを対象にしたへっちょこ団子づくりや、お手玉、けん玉、こま回しといった遊びにも、子供たちからも元気をもらいながら取り組んでいる。

○村上さん

私たちは昔語りや絵本、紙芝居の読み聞かせ、手紙や本の代読などの活動を行っている。2011年の東日本大震災津波の年に結成し、ことしで14年になる。現在の会員数は12名、80代が3名、60代後半が1名、残りは70代である。定例活動は西部公民館で第2、第4水曜日に行い、主におはなし会の本選びやプログラムづくり、新刊児童書の把握、読みの練習、スキルアップ研修を行っている。ことしの計画では、地区のお祭りへの参加が3回、西部公民館事業としての児童施設や学校訪問が4回のほか、個別に要請された幼稚園、保育園、個人宅への訪問朗読も行っている。他に隔月の県立図書館、毎月の放課後児童センターでの読み聞かせがあり、ほぼ毎週活動している。

若者の活字離れや本離れが話題となっている昨今、次世代を育てることの必要性も痛感しており、紙芝居や絵本の朗読体験を呼びかける活動も行っている。活動発展には、会員のスキルアップが必須であると考え、専門講師を招いた実践型の研修会を年5回開催している。

体力がないと続かないことから、高齢者施設訪問の準備と自分たちの体力維持も兼ねて軽体操研修会も行っている。ハードな日程であるが、地域のいろいろな世代の方との交流で得られる喜びが活動の原動力となっている。

訪問要請が多いので、それに応えられるように、会員をふやすことが大きな課題である。また、読む力を維持するために、講師を招聘しての研修をできるだけ続けていきたい。

会員の高齢化によって、運転免許証の返納や介護の問題で移動手段がだんだん制限され、公民館使用料の値上げなど、経費面の状況も厳しくなっている。補助金や支援金を探しながら、何とか工夫して息長く続けていきたいと考えている。

○佐川さん

滝沢市と市社会福祉協議会で主催している睦大学という高齢者を対象とした親睦団体がある。現在28の教室があり、延べ600名がそれぞれの趣味や特技、興味を持っている内容に関して、技能、技術の向上、教養の習得を目的に活動している。各教室には講師という指導者を置いており、人数は内容により異なるが、2～3名程度である。基本的に月2回の活動を行っており、私はその中で卓球教室の代表を務めている。

卓球教室は週3回、月、水、金に1回2時間活動しており、会員は現在74名、各回の平均出席率は約60%である。28教室の中で最も活動回数が多く、会員数も最大である。

活動の基本は安全な健康づくりを目的とした会員の親睦、交流だが、卓球の場合、初級者と上級者ではレベルが大きく異なる。幅広いレベルの74名をどう維持し、親睦と交流を図るかが課題である。同時

に、技術指導も含めてレベルアップを図らなければ長続きしない。会員のモチベーション向上のために、技術指導やマナー習得を含め、持続的な活動にどうつなげていくか、さまざまな試行錯誤を重ねている。

○小山さん

いきいきサロンの目的は、65歳以上の高齢者の閉じこもり防止、元気な生活の維持、介護予防、交流の場の提供による仲間づくりである。

5年前に担当を引継いだ当時、参加者は7人であり、老人クラブをやめた方が多かった。参加者募集のため、内容を明確にした年間行事を作成した。毎回、百歳体操と脳トレを行っているが、塗り絵、単純計算、間違い探しに、いの一番に食いついてくる。さらに月2回、軽スポーツのボッチャ、年4回のクラフト教室と介護予防教室を開催している。また年1回、バス研修旅行を行っており、おとしは滝沢市民としてチャグチャグ馬コの由来を知ろうと鬼越蒼前神社を訪問した。去年は岩手山神社、おとしは滝沢市埋蔵文化財センターを訪問し、縄文時代のストーンサークルの前で記念撮影をして、古代の石器、土器を見学し、勾玉づくりを楽しく体験した。バス研修旅行は参加者に非常に受けている。

高齢者も学習意欲があり、初めての経験には感動するので、できる限り新しいことを取り入れている。現在、参加者が25人にふえ、75歳以上が約9割である。そのうち18人が独居女性で、男女比は男性1割、女性9割で男性参加者が少ないことが悩みである。

○昆さん

矢巾町のおれんじボランティアの代表を務めている。「おれんじ」は認知症サポーター養成講座を受講した際にいただくオレンジリングに由来する。矢巾町では早くから町や包括支援センターが認知症に関する活動を行っており、私自身も10数年前、義母がアルツハイマー型認知症となり介護を始めたことをきっかけに、養成講座を受講した。

包括支援センターが開催する介護者の集いや介護教室にも積極的に参加し、養成講座を受講した方々もお手伝いに来ていたため、交流が始まった。その中で、地域で何か活動ができないかという話になり、2016年11月に、おれんじボランティアを発足した。25名でスタートし、おれんじボランティア養成講座も毎年開催しており、現在は40代から80代まで65名が活動している。

主な活動は認知症予防教室やカフェなどの参加、手伝いだったが、2020年に活動拠点の、えんじょいセンターが矢巾町役場の隣にでき、認知症カフェや誰でも集える居場所として、週1回、おれんじデーというサロンを開催している。ここで私達ボランティア会員は、一緒に活動したり、お世話や傾聴を行ったりしている。

もう一つの活動は、独居高齢者や高齢者世帯の方々のお困り事への対応である。依頼を受けた家庭に定期的に二人一組で訪問し、掃除や草取り、買い物などの生活支援をしている。草取りや掃除は可能な限り本人と一緒に作業し、お話しや要望を聞きながら寄り添って活動している。

私たちは、自分たちも行く道という思いで、学びながら活動している。目標は、私たちも含め、みんなが住み慣れた地域、自宅で、安心して生活を続けられることである。依頼者も、私たち会員も、何曜日の何時に行くということで生活リズムができ、はりあいにもなる。特に独居の方は待っていただき、掃除だけではなく、会話を楽しんだり、笑ったりといった時間は、お互いの生きがいや健康維持につながっていると感じている。

◆ 意見交換

○高橋こうすけ議員

日ごろから地域福祉や高齢者支援の最前線で活動されている皆様に参加いただき、心から感謝を申し上げる。地域のつながりを途切れさせない、誰も取り残さないという思いを、どの団体も強く持って活動していることが印象的であった。さまざまのサロン活動、移動支援、卓球教室、脳トレ、介護予防教

室、音訳活動、認知症サポーターなど、行政だけでは決して実現できない地域の支え合いが、岩手県の福祉を支えていると改めて感じている。

高橋さんにお伺いしたい。町内会の世話人3名で運営しているという資料を拝見した。サロンだよりの発行や、種類の豊富な講座の企画は本当に魅力的ですばらしいと思う。世話人の方々の負担が大きいのではないかと感じたが、その点について伺いたい。また、長年続けてこられて、つながりを切らさないようにしてきたことが非常に印象的であったが、今後、例えばオンラインの活用など、挑戦してみたいことがあればぜひ教えてほしい。

【回答：高橋さん】

スタート時には、誰が中心となって運営するかという話が町内会であり、当時の民生委員2名、前任の民生委員2名、町内会副会長の5～6名でまず始めることになった。高齢化や役目が終わったりして一時は私1人になった時期もあったが、今は一緒にやってくれる60代の人たちも見つかった。やはり1人で背負い込まないことが重要である。何かをやる際に声をかけると、まず4～5名の協力的な方がいて、その後ろに10人ほど、また協力的な方々がいる。例えばクリスマス会をやるにしても、分担して、できるだけ多くの人がかかわるように気をつけながら進めてきた。

スタート時には続けられるのかと本当に心配だったが、視野を町内全体に広げると、あんな人もいる、こんな人もいると情報が入る。2～3カ月前から今度やってくれないかと働きかけを始め、押しつけて押しつけてその方が引き受けると、次の方も、あの人がやるならばやる、とだんだん広がっていく。「私なんかとてもできません…」という人は殆どいなくて助かっている。

○大久保隆規議員

それぞれの立場で大変な御苦勞をされながら、いろいろ工夫して取り組んでいただいていることに、心から敬意と感謝を申し上げたい。お1人ずつお話ししたいが、活動を通して経験されている中で感じている課題や問題、また岩手県として取り組んでほしいこと、県全体で進めたらいいのではないかなど感じていることなど、忌憚なくお話いただきたい。

【回答：昆さん】

私たちのボランティアには、40代から80代の高齢者に加え、現職で仕事をしている方や、心の病を抱えている方もいる。そうした方は、サロンの手伝いを通じて自分の役割を感じ取っている。私のように介護経験者も仲間にいるが、介護から離れたちょっとした時間に積極的に参加していただいている。無理なくできる範囲で、月1回の人もいれば、週2回の人もある。体調不良や、高齢者のお宅に伺うので、感染症流行時には訪問を控えるなど、柔軟に対応し、予備隊が行ったり、ローテーションにするなど、システムも考えている。

どこのボランティアもそうだが、なかなか若い人たちや後継者がいない。最近では退職年齢も上がって65歳や70歳まで働く方が、退職後にボランティアになかなか足を踏み入れられないこともある。矢巾町には岩手医科大学があり、学生のボランティアはいるが、社会人になってもボランティアに目を向けるような働きかけが社会の中であればと思う。実際に退職年齢になる前に、ボランティアを体験したり見ていけば、高齢になったときも自分にも何かできるのではと思う。指導者的立場になって体操したり、自分の趣味を生かした活動ができる。例えば、サロンにハーモニカを持ってきて練習している方がいるが、クリスマス会で演奏してもらおうなど働きかけを行っている。ボランティアの後継者づくりへの取り組みをお願いしたい。

もう一つの課題は交通手段である。活動する人も参加者も、自動車の運転免許がなくなると、なかなかその場所でやっていると言っても来られない。デマンドタクシーも予約が必要など、高齢者的には無理なところがたくさんあり、矢巾町でもなかなか前に進まない。送迎が一つの問題となっている。

〔回答：小山さん〕

健康づくりとして、百歳体操と介護予防教室、そして障がい者スポーツでパラリンピックの正式種目でもあるボッチャを取り入れている。縦4メートル、横3メートルの小規模コートで行うが、年齢、性別、障がいの有無にかかわらず、ルールがわかりやすく、特別な体力や技術がなくても始められるのが魅力で、女性高齢者に大人気である。最初は月1回、5～6人の参加だったが、現在は18人ほどにふえ、開催も月に2回になり、3回開催してほしいと望む声もある。みんなでワイワイと応援し合う雰囲気があり、そこがとても楽しいと感じている。他の自治会とも交流戦を行っている。

百歳体操は、手足に軽いおもりをつけ、大体は椅子に座ったまま行う30分の体操である。毎回、サロンやボッチャ開催前の準備体操として実施しており、体が軽くなったと言われている。

介護予防教室は、年4回、市民活動支援センターの保健師を招き、健康相談、血圧測定、ミニ体操、がん予防や認知症の講話を開催している。

〔回答：佐川さん〕

課題等について話してみたい。私たちが活動している滝沢市の睦大学では、参加者が減少傾向にある。多くの要因が考えられるが、興味やさまざまな楽しみを持ちたいと思っても活動に参加できないのであれば、それを少しでも取り除くことが必要であり、そのためには、さまざまな支援が求められる。県か市町村かの段階は別にして、公共施設や指導者のあっせん、それに伴う経済的な支援が必要である。先ほど、ある場合には、公共施設の使用料は無料という話があったが、そうではないところもあり、きちんとした行政的な支援が必要ではないかと思っている。

さまざまな教室があるが、指導者に対する謝礼が必要な場面が多くある。行政から支出してもらえるのは3分の1または2分の1が限度であり、我々は週3回、月に10回以上、年間を通してかなりの回数、活動しているので、全て指導者を呼ぶわけにはいかないといった問題がある。

さらに、指導者は上級者であれば誰でもいいというわけではない。高齢者を指導することから、福祉的資質を持ち、なおかつ内容に即したかなりのスキル、教養が必要になると思う。指導者をあっせんすればそれでいいというものではないということも重要と考えている。地域や団体によって、行政からの支援にはかなり差が出る傾向があり、その不公平感をなくす努力を各市町村に任せるのではなく、県単位で一定の指標を定めるということがあれば、かなり違うのではないだろうか。市町村に丸投げでは参加者がどんどん減ってくる。レベルにあった指導ができるかどうかの問題である。私が関与している教室では初心者から上級者までいるが、それをどう生かすかが楽しいのであって、上級者が初心者に的確なアドバイスを送れる体制や、それを許す仲間意識の醸成を図ることが、行政からあっせんされる指導者より、よほどいいだろうと考えている。

余計なことだが、行政組織等で実施されている生きがいづくりや教養の醸成講座、行事等は、紋切り型で持続性や継続性がないものが多いように感じる。こういう問題を解消するには、できるだけたくさんメニューの提供と、多くの高齢者が達成感、喜び、生きがいをその中に見出すことのできる構成が必要だろうと考えている。

〔回答：村上さん〕

先ほどから講師の謝礼や交通費のことが出ているが、私たちもそれが切実な問題である。私はサークルの事務局を担当しているが、毎年どこから助成金をいただくか、とても心を砕いている。岩手県高齢者社会貢献活動サポートセンターのご近所支え合い活動助成金や長澤基金助成など、いろいろなところに申請を出している。赤い羽根共同募金の助成も案内をもらったが、よく読むと、公民館で会場を提供してもらったり、児童センターに行っているなど、公とかかわっているサークルには助成金

を出せないと書いてある。そういう助成金も多い。

それから、私たちの活動の特色として、あちこちから本を借りないと成り立たない。盛岡市立図書館や県立図書館、滝沢市立湖山図書館など、いろいろなところから本や紙芝居を借りてお世話になっている。県立図書館でも読み聞かせをしているが、県の場合、車で借りに行くわけだが、駐車料金がかかる。月に何回も行くので、交通費もそうだが駐車料金がとてもかかる。助成金をあちこち探して捻出するために頑張っているが、県立図書館でボランティアが活動する必要上、図書館を利用するときには、どこかの駐車場のスペースを無料で使えるなどの優遇措置があればいいと考えている。支えてくれるところをいろいろ探しているが、たくさんの制約があって、なかなか利用できない現状がある。

【回答：佐々木さん】

映画会を開催する際に、長距離の人たちのタクシー代を県のご近所支援活動助成金を使っているが、これが継続4年間で、あとは自主的にやってください、ということである。老人クラブは体力がどうしてもなく資金稼ぎも限られており、4年だけではなくて、もう少し続けていただけたらと思っている。映画会やいろいろな行事の参加者が、何が楽しみかという、やはりみんなに会えて話をするのである。素材はたくさんあるので、少しでも参加しやすい機会をつくっていくことが大事だし、それを支援していくことが今、非常に必要ではないかと思っている。助成金を受けて2年目だが、あと2年でその後は自主的にとなると、それから先はどうなるのか心配している。タクシー代がこの間までは往復7,000～8,000円ほどで済んでいたが、今は1万円で500円お釣りがあらないかと、ますます厳しくなっている。

また、備品について、5万円以上はよくないとされている。しかし老人センターにはプロジェクターもなく、映画会をするためにどこからか借りてこなければならぬ。そこで、倉庫に眠っている5～6年前のプロジェクターを2万5,000円ほどで購入した。こういう助成についても、もう少し検討して、支援いただければ大変ありがたい。

【回答：高橋さん】

県については思い浮かばないが、明日、盛岡市の敬老バス事業で、30人で遠野市に行くことになっているが、もしかして安い参加費で行けるのはこれで終わりかもしれない、と話題になっている。そういうことに対して県でも何か助成があればと思う。今後どうなるのか不安である。

○高橋但馬 議員

私は住んでいる繋温泉地区で振興福祉協議会の会長をやっており、老人クラブとかかわりを持つことが多い。私たちが子供の頃は老人クラブと小学校低学年の交流のようなものがあって、みづき団子づくりとかお手玉をつくって一緒に遊んだりというのがあった。繋小学校が閉校して、統合してから、そのようなかわり合いをなかなかつくることができなくて、私としても困っている。

もし本日来られている団体の中で、子供たちとの交流をやっているところがあれば、その活動状況を教えていただければと思う。

【回答：佐々木さん】

最初にちょっと話したが、高齢者の方々と小学校の子供たちとお手玉とか、あるいはベッタというもので交流している。最近の高齢者の中には、お手玉ができない方がふえてきていて、できる方は少ない。

それから、子供たちの関係だと、乙部の生きもの探検、ヤマメ、イワナ、サケの稚魚の放流を一緒にやっている。

我々は、その場所の草を刈ったり、危なくないように石を少し動かしたりしている。生きもの探検では、指導的な立場で「これはヤゴだよ」とか「アブラハヤだよ」とか、そういう交流をさせていただ

ている。

〔回答：小山さん〕

当サロンでは、室小路にあるなでしこ保育園の年長児約30人とボッチャ交流を昨年から連続して開催している。年長さんはボッチャが初体験なので、まずはボールを積み重ねて遊んでもらい、次に大きい紙の上にボールを投げてもらう。最後にフラフープの中にボールを入れる競争をして、入ったボールを空中に投げて数える楽しい交流である。

9月初めに、年長さん約20人くらいが「ボッチャを教えてください」とサロンに言ってきて、とてもほほ笑ましい。

○小林正信 議員

先ほど、いきいきサロン室小路では女性が9割、男性は1割しかいないことが課題との話しがあった。男性が定職を終えて、さあこれから何をしようかというときに、なかなか地域に出て行けないという部分や、独居男性、独居女性もいらっしゃるが、独居男性が孤立しがちという課題もあって、そこにどうやって生きがいを見出して生き生きと暮らしていただけるかというところが大事だと、皆様の話しを聞いて感じた。独居男性に限らず、多くの方に生きがいを持って参加していただくために、皆様は活動の中で一生懸命工夫されていると思う。課題もある中で、生きがいを持ってもらうための工夫や、参加してもらうための工夫をお伺いしたい。

〔回答：佐川さん〕

私は卓球を通してさまざまな方と交流しているが、卓球はスポーツの中でも非常に激しいスポーツである。それを初心者から上級者まで同じ場所に集まるということは、非常に難しい事ではあるが、非常に有意義な事でもある。つまりは、上級者がそれなりに初級者とも一緒にできるようなシステムをつくれればいいわけで、初心者の方はいきなり上級者にはなれないので、そのレベルに応じて目標をもって、達成感、成功感、快感を体感する、そのことによって持続性が維持される。これは卓球に限らずなんでもそうである。教育の場面でよく言われることである。成功体験、これが持続性の最大の要因となるわけで、その辺を重点的に私は考えている。ですから、先ほど申し上げたが、行政的な支援をお願いしたいというところで、指導者あるいは講師の派遣だとかあっせんとかということがあるわけだが、その資質は単に優れたその道の達人ではなく、優れた教育者でもなければならぬ。さまざまなレベルに合わせた対応ができなければ、私たちのような初心者から上級者がいるところでは、難しいだろうと思う。指導者のあっせんをお願いして、今年からようやく3カ月で6回指導者に来ていただくようになって、そういう時間を設けているが、その辺が重要なところだと思っている。

〔回答：佐々木さん〕

どうすれば皆さんが会員に入ってくれるかというのはズバツと決まるようなものはない。うちには去年9人、今年は4人加入があったが、ひとつはマージャンをやりたい、あるいはグラウンド・ゴルフをやりたい、いろいろとやりたいことがある中でマッチすると入ってくれる。

それから、私は「元気なうちに入らないともう声が掛かりませんよ」というようなことで話しをした。敬老会のときにいろいろ話をして今年4人入っていただいた。やりたいことがいろいろいっぱいあるから、いろいろなメニューをそろえていく必要があると思う。

〔回答：小山さん〕

室小路は、約1,000世帯で3,000人。4人の民生委員がいる。私もその一人で、後期高齢者世帯、独居の方、ひとり親の家庭を中心に見守りをしている。

滝沢市は32の自治会があり、老人クラブは19自治会に減少した。当サロンの参加者が増加している理由は、参加者の意見、やりたいことを積極的に取り上げている点だと思う。クラフト教室を多く取り入れ、創作に参加してもらったり、バス研修旅行で名所旧跡の見学等を行っているが、参加者にも学習意欲があるので新しいことに挑戦してもらっている。

今は70歳でも男性は再任用になって働いているのが男性が少ない理由だと思う。

○島山茂 議員

いろいろと話を聞いて私も1点お伺いしたい。今は人生100年時代ということだが、新聞等でもごらんのとおり岩手県は健康寿命が短く、全国でもワーストのほうでさまざま取り組みが必要である。

その中でもWHO世界保健機構が言っているのは、心と体と社会的に健康でないと本当の健康ではない。そういった意味でも皆さんが老人クラブとかボランティア団体とか趣味の団体とかをやっていることはすごく大事なことだと思う。ただ、先ほど説明があった通り、そういった団体が今減っている。男性が少なかったり、担い手がいなかったり、維持費が大変だったり、公共交通での移動が大変だったり、さまざま課題があるわけだが、その中で私は、組織を維持するための次の役員づくり、皆さん苦労なさっていると思うがそのあたりをお聞かせいただければと思う。

【回答：佐々木さん】

私は会長になって3年目になる。私の場合は、会長、副会長二人、事務局長、会計がやめるというようなことで選考委員会が開かれて、その選考委員の90歳を超える大先輩に「佐々木章一君やれ」と御指名いただいて、気持ちはちょっとあれだったが「はい」という形で引き受けた。

では、今どうするかというと、退職して再雇用が終わった若い方を「人が足りないから来てすけろ」という形でマージャンなどの会に誘って入ってもらおう。そういう方々を次の改選期に役員として登用させながら維持していく必要があるという考え方でやっている。

例えば、会長になった時点から、次の人あるいは次の体制をどのように皆さんにお願いしていくかを考えていかなければならない。いろいろな大会をやっているが、会長はただのろしを上げるだけで、あとはポッチャにしる、シャッフルボードにしる、あるいはインドア・ボウルズにしる、それぞれの担当に任せて、そしてお願いして、そして自信を持っていただきながら、活動を通して後継者を育てていく必要があると思っている。今は、特にも若い方々を会に加入させていく取り組みをしている。

○島山茂 議員

すばらしい取り組みだと思う。

○ハクセル美穂子 議員

これまでのお話も大変ためになった。本当にさまざまな活動をされていて、私も資金と公共交通が大変というのは、それぞれの活動は違えども、課題のところは似ていたと思った。私も実は、読み聞かせをしている。私の場合は読み聞かせの団体にPTAで入っているが、高齢者の先輩方、村上さんのように活動なさってる方が毎週のように来てくださって助かっている。活動資金のところは本当にその通りだと思った。

いろいろな情報をどういったところから得られているのか、例えば指導者を派遣してほしい時などはどういった行政機関——だいたい市町村だと思うが、あるいは社会福祉協議会だったりスポーツ協会だったりさまざまあると思うが、どういった方々と特に情報交換をしてアイデアを得られていらっしゃるのか教えていただければと思う。

あと、皆さんの活動のお知らせ、例えば担い手になっていただく方に入ってもらった時に、どのように周知をされているのか、紙なのか、口コミなのか、何回も声かけしてきてもらっているとか、教えてい

ただきたいと思う。

【回答：佐々木さん】

活動資金の関係については、いろいろ情報をいただきながら、対象になるかならないかわからないが、今、助成するというのは約90事業団体くらいある。それを一覧表にして、これが我々に適しているかなとかそのようなことで進めている。例えば、先ほど話したご近所支え合い活動助成金がなくなるとすると、では次は何を探そうかというようなところ。

また、私たちは映画会の中でチラシを出している。その中には、どなたでも参加できますよという項目を入れており、会員全員に配布して関係する人たちにも口コミで広げてもらっている。映画会には、常に四、五人は会員以外の方が参加していて、映画の内容によっては矢巾町から来られる方もいる。そういった事もあるので、オープンにして広げていっている。会員以外でも、1年間で何回も映画を見に来ていると、だんだんと入らなければならないと思うようだ。

【回答：高橋さん】

山岸五丁目サロンは、高齢者に限らず全町内老若男女が対象ということで、毎月初めに町内全班に「サロンだより」を回覧していただいている。例えば今なら、12月の月2回、第2、第4月曜日にこういう事をやりますよとか、どなたでもどうぞとか、この時は200円ですよとか、そういう回覧を回しているが、回覧だけでは参加者は広がらない。今回はこの人にはぜひ来てほしいなというときは、直接声かけするなど、もう一つの手立てが必要。

現在、婦人部で陶芸教室を計画しているが、参加申込みが次々にくると思っていたのにしばらく反応がない。ええっと思って。やはり回覧だけだと大勢来るようなことはなかなかないので、重ねて呼びかけようと思っている。

あと、どういった事業を利用しているかということであるが、地域包括支援センターからは、こういった老人施設があるよ、利用のときにこういうやり方があるよといった話とか、消費生活センターからはオレオレ詐欺の話とか、盛岡市の学びの循環推進事業といって一流の先生方に無料で来ていただける事業があって、こちらは必ず年1回利用している。ほかにも、保健所、女性センターや消防署など無料で来てもらえる方を2カ月に1回くらいは入れている。

町内会から当初は月2千円という予算を組んでもらったが、続けてみて、やはり足りないかと相談して、今は毎月4千円をいただいている。

一昨年までは年1回バザーもやっていたが、運営する側の高齢化等で、かなり大変だということでやめた経緯もある。

○鈴木あきこ 議員

皆さんのお話を聞かせていただいていると、私は家に帰ると「あー疲れた」と言って、だいたいのソファにごろんと寝転がってしまうが、そんなことしている場合ではないな、皆さんの方が元気だなと、今すごく刺激を受け、私の生きがいは何だろうと考えていた。

子供たちとのかかわりを持ってくださっている団体がいっぱいあるが、そのような中で、今の子供はこうだな、こうしてあげたいな、ということがあれば伺いたいということと、今、課題ばかりが見えてきたので、皆さんの活動の中でこれが私の生きがいだというところを伺いたいと思う。

またそれが、これから入ってほしいという方に伝えることで気持ちが伝わっていくのではないかと、いうところも含め、活動の中での生きがいというか楽しいところを伺いたいと思う。

【回答：村上さん】

先ほど、年に3回お祭りに参加していると申し上げたが、一つは青山のさくら祭り、二つ目は西部公

民間のお祭り、三つ目はアイーナで行われる福祉協議会のお祭りがある。そこで、私たちももちろん読み聞かせは行すが、三、四年前から読み聞かせ体験コーナーをつくっており、声をかけていると高齢の男性の方が懐かしいなど言いながら、やってくれる方が結構いる。

それと、子供たちも、今スマホとかそういうものに染まっている実態はあるが、紙芝居とか本を読むということにとっても興味を示す。その場で体験してみると、最初は恥ずかしいなんて言っているけど、1回やると解放されて次もやってみようとなる。これは男性の方もそうである。私たちはぜひ会員にお誘いするが、ずっととなると足の踏む方が多い。それでも、体験によって、「読んでもらうのも楽しいけど、実は読むこともこんなに楽しい」ということを経験してもらえれば、いつかどこかで孫に読み聞かせたり、自治会で読み聞かせたりということをしてくださるのではないかなと思っている。今すぐ向かってこなくても次世代が育っていくのではないかなと思っている。

【回答：小山さん】

以前、滝沢中央小学校で昔遊びをやろうということで、地域のスクールガードと一緒に1年生とお手玉やけん玉などをやった。初めての子供はひざを柔らかく使うことができず苦戦していたが、親がけん玉をやっている子供はスーパープレイ連発ですごくびっくりした。小学生との交流は心が洗われて自分達も楽しいイベントである。

また、一つ前の質問で、どこから情報を得ているかということだったが、私どもは滝沢市社会福祉協会からボッチャも教えてもらったし、今回は移動式スーパーを紹介していただいた。参加者は75歳以上が多いので、二、三人が集まって買い物ができるればよいと思い、業者にサロンでの説明会を企画した。12月から買い物ができるようになればよいと思う。

【回答：昆さん】

今、移動販売車の話が出たので先にその話しをすると、うちのサロンにも、木曜日の12時になると移動販売車が来るので高齢者の方々が弁当を買ったり、お団子を買ったりしている。

先ほどの子供との触れ合いというのも、事務局である地域包括支援センターが、さまざまな人それぞれのできることをすくい上げて高齢者との交流に持っていこうということで、私たちボランティアの中には教員をして退職された方がいるが、夏休みと冬休みにサロンの2階で勉強会を行って、勉強が終わったら1階におりてきて高齢者と触れ合うといったことをやってみたり、いろいろな事を試みている。

私は、訪問して掃除などをする生活支援を主にやっているが、時々サロンにも顔を出して、図書センターから高齢者向けの本や紙芝居を借り、読み聞かせもしている。

私も民生委員をやっている、やはり地域の高齢者にもぜひともサロンに来てほしいと思っている。でも中央部でやっている交通の便がないので来られない。矢巾町には社会福祉協議会でやっているこびりっこサロンというサロンがあって、町内の多くの地域でやっている。また、老人クラブの方々が補助金をもらってえんじょいサロンというものを開いている。

私もサロンにかかわっているのでそのお話しをすると、「このサロンに月に1回来ても次の週は別のところのサロンでシルリハ（シルバーリハビリの略）体操をし、また別の週には矢巾町えんじょいセンターのサロンに行けば、月に何回も出かけることができる。出かけることで自分もフレイル予防になり、体力維持ができる」と地域で話をしている。中央部でやっているえんじょいセンターの週1回のサロンでは、参加する方々がだんだんと輪を広げていって、ここで集合といって同級生を呼んだりして手芸が始まったり、農業新聞に載っていたかるたに色塗りをしてみんなでかるた取りをしようとか、どんどん広がっていった。働きかけがすごく大事で、そのようにやっていくうちに、皆さんからやりたいことが出てくるのがすばらしい。

絶対行きたくないという方はどこにでもいるが、それを知っているのは民生委員なので、訪問した際に「足腰が弱らないように行きましょう」と、時期を逃さないように常にサロンの計画表をカバンに入

れて持ち歩いて誘っている。やはり地域でコミュニティー内で顔を知っていることが重要だと思う。

これは自治会の話だが、私の地区は550世帯で1,300人だが、コロナ禍でやっていなかった地域の結っこ祭りを昨年から復活させて、自治会と老人クラブと子供会と食生活改善推進員と民生委員と保健推進員が公民館に集まって、民生委員はくじ引きや風船ヨーヨー釣りをやったり、保健推進員は健康パンフレットを役所からもらってきて配布したり、食生活改善推進員はお餅つきやおふるまい、子供会はビンゴゲームをして景品を配ってくれたり、老人クラブは輪投げゲームと、100人くらい集まった。子供たちも喜んでお母さんと一緒に集まってくれるので、こういう地域の取り組みというのも大事だと思う。

また、近所付き合いも希薄になりがちである。地域のこのような行事やサロンで近所の人もわかり合えると災害のときに一番助かると思う。もし大きな災害があった時には避難所へ一緒に行こうといった近所の声かけが重要であり、そのためには地域のサロンに高齢者を集めて顔見知りにすることが大事なので、気軽に行けるようにサロンをたくさんつくるのが、これからの高齢者の健康づくりや生きがいづくり、防災対策につながっていくのではないかと思う。

○鈴木あきこ 議員

今、ひとりでお住まいの方というのは孤立すると言われているので、ぜひそういう方を皆さんのような活動に誘っていただいて孤立がないことと、あと子供と言ったのは、今はどこかで会って声をかけようものなら不審者扱いとなるが、経験豊富な高齢者と地域の中で接するという事は、やはり大事であるので今後も続けていってほしいと思って伺った。

あと、ひとつ、村上さんの最初のお話しの中で個人宅で朗読をという話があったが、こちらを教えてください。

〔回答：村上さん〕

要請が結構ある。月に2回訪問しているが、2人で対応するので本当に忙しい。

その方は、短歌をされているが目が見えない方で、自分で短歌をつくって投稿している。機関誌なども届くが、それを読むことができない。それから、自分がつくった短歌を書くことができない。私たちがその方の音声を短歌の先生への手紙にしたり、あるいは先生から添削されて戻ってきたものを読んであげたりしている。私は、短歌の世界とは無縁に暮らしているので、とても勉強になる。感性が豊かな方で私たちにとっても学びになり、喜びになっている。

ニーズは結構ある。ニーズはあるが、私たちの会員が少ないがために対応できていないという現状である。

○小林正信 議員

それはどこを通して依頼がくるのか。

〔回答：村上さん〕

その方は同じ町内の方に相談したようで、同じ町内に住んでいる私たちの会員がそれを受け取ったかたち。

それから、赤ちゃんの集まりに来てどんな本を読んだらいいのか教えてほしいという依頼もあるが、なかなか対応できない状況で、もっと会員をふやさなければいけないと思っている。

○村上秀紀 議員

昆さんにお伺いしたい。お手伝いや昔語りなどで伺った方にプラスの変化が訪れてくれれば、当然皆様方の生きがいとかやりがいにつながると思うが、支援された方も元気になれば、まだまだこれからも健康で暮らしていきたいという生きがいにつながることもあると思う。皆さん、そして支援に伺った

方々それぞれの、生きがいにつながった具体的な例があれば教えていただきたい。

また、訪問したときにお部屋の変化などで感づくことがあるかと思うが、そういったところを伺えればと思う。

〔回答：昆さん〕

先ほど誰一人孤立しないようにというお話があったが、どうしてもみんなが集まる場所には行きたくないという一人暮らしの高齢の方もいる。私たちは母体が地域包括支援センターなので、遠くに住むご家族からの依頼を受けることも多い。まずは傾聴から始める。御家族からこういう人が行くからと連絡してもらったりしています。会員には傾聴ボランティアをやっている仲間もいるので、そういった方に担当してもらって何回か訪問するうちにだんだんと、古新聞を出してきてほしいとか、灯油をポリタンクに入れてちょうだいとか、馴染んできて信頼関係ができてくると頼んでくれることも多くなってくる。

最初の何週間かは同じ人が担当して、いつもおれんじボランティアのユニフォームを着ていく。そうしていくうちに、おれんじボランティアですと言って訪問すれば、人がかわってもいつものボランティアが来たとして受け入れてくれる信頼関係ができる。

私たちは報告書を記入することになっているので、その報告書の中に、先ほど質問のあった変化を記載している。要支援1とか要支援2の方は、地域包括支援センターのケアマネージャーがついているので、すぐに連絡をとっている。例えば、こたつの周りを掃除したらいつもより汚れていて葉が落ちていたとか。口頭でも連絡して、ケアマネージャーに対応してもらおう。そういった連携は取れている。私たちはヘルパーではないので、身体には触れることができないが、例えばヘルパーが11時に来るお宅であれば、私たちは10時に訪問してお風呂を掃除してお湯を入れて準備してヘルパーに引き継ぐ。そうすればヘルパーの限られた時間を有効に活用できる。体調をうかがいながら、元気な方であればお話ししながら一緒に庭に出て草取りをしたりとか、今の時期だと落ち葉拾いをしたりとか、そういったかかわりを持ちながら少しでもできることを促している。

ほかには病院から退院してくるけれどもゴミ屋敷で介護用ベッドが入れられないということで、多人数で訪問して片づけをして介護用ベッドが入るスペースをつくるということもありました。作業の後は関わった方皆が安心した表情であった。

私たちは、自宅でやっていることをよその家でやるというだけで全然苦にならない。ボランティア活動で外に出るというのは自分の生活のリズムにもなるし、決まった時間までに訪問して人に会い、体を動かすことでやりがいや生きがいにもつながっていると思う。

先日話題になったのだが、会員みんながそのような感じで、意外とやめていく人はいない。私たちのいい居場所になっている。私たち会員の特典は、心配なことがあればすぐに地域包括支援センターに相談できる安心感があり、仲間もいるし、とてもよい居場所になっているのだと感じている。

○小西和子 座長

まだまだたくさんお話しを伺いたいところだが、予定の時間となったので、最後に御参加いただいた皆様方から本日の意見交換の感想をいただきたい。

〔回答：高橋さん〕

やはり、いろいろな面で難しいところには必ずぶつかるんだなと、同じだなと思って伺っていたが、その時に立ちどまらないで、じゃあこうしたらどうかな、こういうのはどうかなと、いろいろなアイデアを、いろいろな力を借りながらやっていらっしゃるということを知ってよかった。

〔回答：佐々木さん〕

県議会議員の先生方とお会いし、いろいろなお話しができてよかったと思った。こういった機会がたびたびあればよいと思った。

【回答：村上さん】

きょうは、高齢者といわれる人たちがいろいろなかたちで活躍しているのを知ることができた。私は70代前半だが、うちのサークルには90代の方もいらっしゃって「自分はもう」とおっしゃるが、帰ったらまだまだ大丈夫と言えそうな感じがして、私だけでなく、活動している会員のどの世代もみんなが元気をいただいた。

【回答：佐川さん】

皆さんからさまざまな意見などを伺って非常に参考になった。私が一番感じるのは、居住地域あるいは市町村でもって、不公平感がないような、高齢者がどこに住んでも同じサービスを受けられるあるいは機会を与えられる、そういう岩手県であってほしいなと感じている。

【回答：小山さん】

やはり異業種の方が集まるのはすごくいいなと思った。だいたい同業者が集まって意見を出し合うが、かえって異業種のほうがためになる意見が出るような気がした。

【回答：昆さん】

いろいろな方のいろいろな活動を聞いて、岩手県どこでも、高齢者になっても安心して住み続けられるまちづくりを期待したいと思った。

○小西和子 座長

皆様方の話を聞いて、すばらしい活動をされていると思った。そのような活動が地域を元気にし、それから生きやすくしていると感じた。皆さんもおっしゃっていたが、そういった事がいつまでも生きやすいような岩手県をつくっていく原動力になっていくのだなと思った。

きょうはたくさんのお力を私たち県議会議員に与えてくださり感謝申し上げます。

本日頂戴した御意見、御提言については、県議会の全議員が情報共有し、今後の議員活動に生かしてまいりたい。これからも県議会に対する御意見や御提言があれば、地元の県議会議員あるいは県議会事務局までお寄せいただきたい。

本日は、お忙しいところ御参加いただき感謝申し上げます。

以上をもって、意見交換会を終了する。